



江刺甚句まつり 50周年記念

火防祭と江刺甚句まつり

えさし郷土文化館

菊田一夫記念館

奥州市（主管：江刺総合支所地域支援グループ）

岩谷堂大火と火防祭

From the Great Fire of IWAYADO
to a Prayer for Reconstruction

近代消防が確立する以前の市街地では、木造家屋から発生した火災は気候条件によって大規模な類焼となり、しばしば壊滅的な被害を与える惨禍となることがありました。

江刺地方では享保16年(1731)の岩谷堂大火をはじめ、多くの火災が発生しており、これらの災害に対処するために市中では消防組などが組織されました。また、こうした大火に対し人々は神仏に火防を祈願し、町全体が惨事に見舞われた際には、沈鬱の民情を復興へと喚起するための祭事を求めたことから、文政5年(1822)に遠江国(静岡県)より秋葉神社(秋葉院)が勧請され、岩谷堂の火防祭もこの年代にさかのぼると考えられています。

江刺地方の中心市街地である岩谷堂は、仙台藩の拠点である岩谷堂要害を中心に町場が形成されており、商家などが狭小に軒を連ねる城下町では江戸時代を通じて数回の大規模火災が記録されています。いずれも100戸以上もの家屋が焼失するなどの甚大な被害が伝えられており、その後の明治5年(1872)の大火では、住宅324戸のほか類焼により南町の古刹「多聞寺」が焼失し、近代に至っても岩谷堂の町は頻発する火災の猛威に脅かされていました。

したがって、各地域の消防組織や消火設備の近代化が図られ、火災規模が減少傾向へと転じるのは明治末期以降になってからと考えられます。

年代	災害	被害状況	備考
享保16年(1731)	岩谷堂大火	247軒焼失	—
寛保元年(1741)	岩谷堂大火	125戸焼失	—
寛政元年(1789)	岩谷堂大火	171軒焼失	—
天保6年(1835)	岩谷堂六日町大火	不明	—
安政6年(1859)	岩谷堂大火	住宅511戸・土蔵120棟焼失、死者10名 川原町松岩寺類焼	豆腐屋火事
明治5年(1872)	岩谷堂町大火	住宅324戸焼失、多聞寺焼失	オモセ火事
明治38年(1905)	岩谷堂町大火	住宅200戸以上焼失、川原町松岩寺類焼	—
明治39年(1906)	岩谷堂町大火	川原町・六日町など450戸焼失	あぶら屋火事



岩谷堂町消防各組徽章略図

明治初期

個人蔵(えさし郷土文化館寄託)

江刺郡の消防対策は享保19年(1734)以降に、郡内の各町場や御初蔵、御番所などが万一出火した際に、近隣の村々からの出動者や持道具などの分担について定めた「火事早翔割」が設けられており、一郡協力の消防体制がありました。また、御本穀蔵など藩の施設にも消防施設があり、これらは明治以後も旧慣として存続していきました。

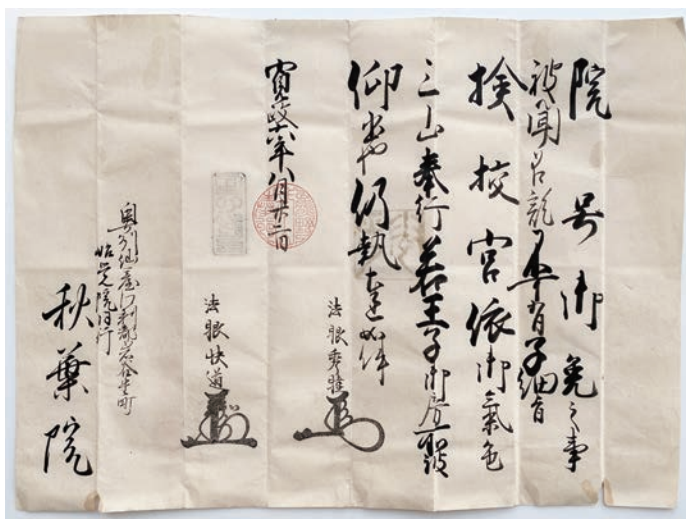
岩谷堂町では、明治12年(1879)に定員50人の消防組織「五十人消防」が結成され、フランス型ポンプを購入するなど、消防近代化にも積極的に取り組みました。

秋葉神社は神仏習合の火防・火伏の神として信仰される秋葉権現を祀り、江戸時代中期以降に全国へと広まりました。岩谷堂には文政5年(1822)に勧請され、祭祀は岩谷堂伊達家の家中修験(家臣の山伏)であった秋葉院が司り、地域の火防守護として崇敬を集めました。

火防祭は新春に山伏の一行が権現(獅子頭)を繰り出しながら火伏や無病息災を祈り、家々を門付けしたことに起因し、各地の村落でも行われていました。明治5年(1872)に修験道が廃止されると、その担い手は住民へと委ねられ、権現舞なども地域で継承されるようになります。加えて岩谷堂では近代以降に館山大山神社と裏町稲荷神社の例祭がそれぞれ発展を遂げ、のちにそれらは一体的な住民参加型の祭典へと展開し、「江刺甚句まつり」の素地を形成していったものと考えられます。



岩谷堂秋葉神社



補任状
院号御免之事
寛政6年(1794)
えさし郷土文化館(秋葉院旧蔵)

修験各派の本寺より山伏に執達される先達職、年行事職、僧位、僧官、院号、結袈裟、色衣などの免許状。山伏はこれらの補任状によって社会的な立場や派内での権限が位置づけられていました。

秋葉三尺坊御影札木版

江戸時代
えさし郷土文化館(秋葉院旧蔵)

三尺坊は遠江国の秋葉山に住んでいた僧。神通力を得て鳥形両翼を持った天狗となり、白狐に乗る姿で飛行自在の術を操ります。愛宕山と並ぶ火難除けの神として信仰を集めました。

院号御免之事
被聞召訖不可有子細旨
檢校宮依御氣色
三山奉行若王子御房所被
御出也仍執達如件
法眼秀撞(花押)
寛政六年八月廿二日
法眼快道(花押)
奥州仙臺江刺郡岩谷堂町
始覚院日行
秋葉院



江刺甚句まつりの源流

The Source of the Esashi JINKU Festival

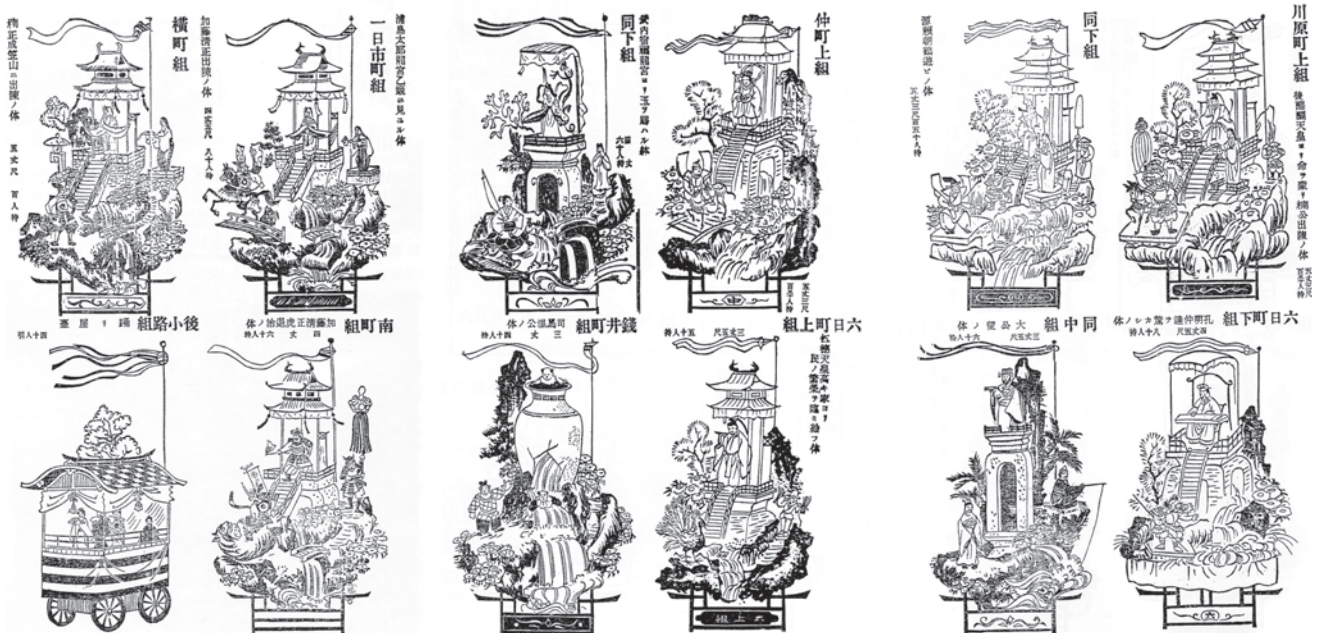
岩谷堂の町内で屋台を練り出す祭典の源流には三つの例祭があります。一つが旧暦3月9日の大山神社(館山)であり、二つ目が明治から昭和初期まで続いた裏町(現前田町)稲荷神社の例祭。そして三つ目が旧暦1月24日の秋葉神社火防祭で、いずれも盛大なものでした。

1. 大山祭

町家を見下ろすような15mにもおよぶ山車を作り、150人が担いで町内を練り歩きました。最古の記録は明治35年(1902)4月の「大山祭」で、この著大な山車による大山神社の大祭がいつまで続いたかは不明ですが、電線が施設された明治末年が下限であろうとされています。なお、最後の記録は昭和41年(1908)5月に「岩谷堂町立小学校新築開校餘興祭記念大山祭」に撮影されたもので、記念の山車の木版図録も残されています。山車の大きさは川原町上組、仲町上組・下組の五丈三尺(約16m)の高さが最大でした。



岩谷堂小学校落成記念での山車運行 ▶
昭和13年(1938)



明治41年(1908)『大山祭略図』より

2. 稲荷祭

裏町稲荷神社は花柳界の信仰を集めており、明治43年(1910)4月の例祭では町内の芸妓たちが印半纏に股引姿で山車を曳き、近在より数千人の参詣者があったとされます。昭和初期には山車の運行のほか、囃子手踊りや仮装行列もあり、南町五十瀬神社では火渡式が行われるなど、火防祭の性質をも加味した全町を挙げての催しへと発展しますが、戦時中に休止を余儀なくされて以降、再開されることはありませんでした。

3. 秋葉神社火防祭

秋葉神社火防祭は旧正月の24日に開催されていたことから「二十四日祭」とも称されていました。

明治41年(1908)には、神輿渡御や屋台山車の運行、手踊りや富籤などが催され、料理店の露店もあって盛大に賑わったという記録が伝えられています。大正11年(1922)には25歳連が参加し、厄払いの祈祷のほか、荷馬車に町内の芸者連を載せ、三味線、太鼓で賑やかに囃し立てながら町を練り歩いたとされます。その翌年には総勢30名の25歳連が仮装行列を組んで練り歩く催しが好評を博し、それが戦後まで続く行事として定着しました。42歳連は昭和2年(1927)に祈祷式を挙行し、町内での奉仕活動などを行いますが、本格的な祭りへの参加は戦後になってからとなります。次第に同祭は近隣からの「にわか衆」を巻き込みながら発展し、昭和8年(1933)には余興参加だけで253組、1,071名のぼり、最大40名の神楽衆も参加。それ以外にも数多くの門付衆がいたと推定されます。戦火の拡大により25歳連による催しは昭和14年(1939)を最後に休止されますが、厄払いの祈祷式と火防祭の祭礼は戦時中も継続されました。

25歳連の祭典参加は終戦直後の昭和21年(1946)より再開。翌22年には近隣からの演し物や仮装行列に懸賞が出るなど、地域復興を兼ねた催しとなり、昭和26年(1951)には42歳連が本格参加。厄年連の屋台が運行され、昭和38年(1964)には名称も「岩谷堂火防祭」となります。

昭和45年(1970)からは「江刺春まつり」へと改称して4月に開催。「大山祭」の廃絶により大正時代から長く途絶えていた各町の町内屋台がこの年から再開されました。

昭和49年(1972)からは5月3日・4日に日程を移し、今日の「江刺甚句まつり」が誕生。厄年連(年祝連)が主体となり、祭典を運営しながら「江刺甚句」のほか、楽曲・振り付け・衣裳を創成して披露するという仕法が半世紀にわたり継続されています。その源流としては厄年連による仮装行列にみられる近代の祭典において既に確立されていた慣習であり、こうした伝統は現代の「風流芸能」ともいえる文化です。



秋葉神社火防祭の25歳厄年連
昭和5年(1930)



町内屋台の運行
江刺甚句まつり

「江刺甚句」の起源

The Origin of Esashi JINKU

日本民謡の中には「甚句」と称する曲目が数多く存在し、それらは伝統的な歌謡の一形式として江戸時代に発生したとみられています。また、全国各地に散在する甚句の唄を比較すると、詩型が7・7・7・5で1コーラスを構成するものが多く、前後に囃子言葉が挿入されるのも特徴です。

江刺地方東部を中心に伝えられていた「甚句」は、座元(家元)や庭元を置かず起源や唄・踊りの種目を伝承した「巻物」や「目録」などの記録も存在しません。本来は労作歌的に歌われていたものが、次第に各種の祝宴で「四海波」「さんさ時雨」の祝儀唄に続く余興として、酒宴歌に位置づけられる存在になったものと推定されます。

民謡の系統としては「塩釜甚句」の流れに属するものとされ、歌詞の中には「仙台松坂」「仙台めでた」「さんさ時雨」など旧仙台藩領の祝唄の文句が多く唄い込まれているのが特徴です。また、「甚句出て来た座敷が狭い狭い座敷も広くなる」の歌詞は、栗原郡の「文字甚句」と同様のものであり、「チョイサア」の囃子言葉も共通しています。このことから江刺地方の「甚句」は「塩釜甚句」をはじめとする宮城県地域の民謡と密接な関係を持ち、「祝唄」としての性質が濃厚なことから祝宴で慣例的に披露されてきたものとみられ、現在も江刺玉里地区に伝承される甚句踊りがその原調に最も近いものと考えられます。

玉里地区での甚句踊りの演目には、「一人甚句」、男女で踊る「組甚句」、多勢で踊る「廻り甚句」、ほかに「壁塗甚句」、「唐傘甚句」、「石投げ甚句」などがあり、いずれも大太鼓、小太鼓、三味線、横笛、手平鉦の囃子に合わせ、手拭い(鉢巻やほうかむりをする)を持って踊ります。これらに類似する踊りとしては、亶理郡や伊具郡に「石投げ甚句」があり、その名の通り踊る恰好が石を投げる時の姿に似ていることが演目の由来となっています。また、仙台西部の「定義あいや」は甚句体の曲調で、男女一組で踊ることから別名「あわせ踊り」とも称されており、芸態も「組甚句」と相似しています。このように、藩政時代に仙台周辺で発生した「甚句踊り」は次第に領内へと伝播し、各郡村に定着したものと推測されます。

明治中期頃、江刺郡福岡村(現北上市口内町)の「芸人」と称された昆野惣左エ門は、旧来の「甚句」の曲節と芸態に創作的変容を加え、これが江刺郡全域に広まったとされています。また、同郡梁川村出身の古川流手踊師匠、後藤春治は大正年間に遠野市小友の鷹鳥屋地区に甚句踊りを伝えており、現在も「鷹鳥屋甚句踊り」として「一人甚句」、「組甚句」、「唐傘甚句」、「壁塗甚句」、その他「かつぼれ」、「おいとこ」「ガンニ(願人踊り)」などの踊りが伝承されています。なお、江刺米里の九才坂地内には、春治の門人らによって昭和29年(1954)に建立された顕彰碑が所在しています。

「江刺甚句」が広く知られるようになったのは、岩手県フォークダンス協会の千葉信が江刺地方の「甚句踊り」を調査・研究し、レコード化を企画したことによります。「黒田節」で知られる赤坂小梅を唄い手に起用し、昭和35年(1960)、盤面にはじめて「江刺甚句」と記されたレコードが日本コロムビアから発売されると全国にその名が紹介されました。

昭和49年(1974)、第1回目の「江刺甚句まつり」開催にあたり、町中を行列するための「流し踊り」が計画され、全日本民謡指導者連盟副会長の及川庄吾によって「江刺甚句」が行進風に振り付けされました。また、曲節も音楽教師の高橋和夫による採譜、作曲家の赤星健彦による編曲を経て新たな「江刺甚句」が誕生。それによって江刺甚句は各種イベントで踊られるようになったほか、学校教育やレクリエーションの一環としても広められ、地域で子どもから大人まで親しめる民謡として定着。千人規模が町中を流し踊る市民総参加型の「江刺甚句大パレード」が同祭を象徴するイベントとして発展しました。



▲ 玉里 江刺甚句踊り保存会



後藤春治顕彰碑 ▶
昭和29年(1954)米里九才坂

厄年連による 創成文化

Creative Culture by Group of 42 and 25
Year Olds Considered to Be of Unlucky Age

昭和49年(1974)、第1回目の「江刺甚句まつり」の主体を担う42歳連「りよくゆうかい緑酉会」では、新しい形の祭りを模索。これからの祭りの在り方を根本的に見直すべく、後輩の「しんじつかい親戌会」「じゅうしかい十四会」を交えた会合を重ねた結果、三年連帯で祭りを創ろうという合意に達しました。つまり「りよくゆうかい緑酉会(42歳連)」は本祭りを担当し、前夜祭のイベントを提供。「しんじつかい親戌会(41歳連)」は縁日市を担当し、お祭り広場の活性化を図る。「じゅうしかい十四会(40歳連)」はお祭り広場の管理運営とPRを担当。各年代連が職責を果たすことによって相乗効果が生まれ、地域活性化の創出にも繋がることを企図したもので、この三年連帯(40～42歳連)による祭典運営の仕組みは現在も継続されています。また、行政や商工会とともに「観るまつりから参加するまつりへ」「市民、観客総参加の参加型まつり」「ふるさと回帰を唱え、まつりを通し愛郷心の盛り上げを図る」などの基本理念も策定され、その一つが「流し踊り」を主体とした新たな「江刺甚句(甚句パレード)」の創成でした。

緑酉会の会員は、振り付けを考案した及川庄吾のもとを訪ねて新しい「江刺甚句」を習得。さらに本祭りではお祭り広場を利用して及川自身が江刺甚句の伝習を終日行いました。

当時、一地方のフォークロアであった芸能を意図的に一市全体を包括した観光イベントとして発展させた事例は徳島県の「阿波踊り」などにみられましたが、岩手では「盛岡さんさ踊り」が創設される以前のことであり(さんさ踊りパレードの創始は昭和53年)、本県におけるその嚆矢といえるものでした。

芸能であるがゆえに旧態の「甚句踊り」や「江刺甚句」は習得に修練が必要であったのに対し、新しい江刺甚句の踊りは即成が可能で、子どもから大人まで多数が容易に習得できたことから、群衆による総踊りが実現。加えて42歳連「りよくゆうかい緑酉会」では「ばくろう馬喰ばやし」を創作したことにより、当時の新聞等による祭典名称も「ばくろう馬喰ばやしと江刺甚句まつり」と表記されていました。

「ばくろう馬喰ばやし」は、江戸時代の岩谷堂には馬市が置かれ、仙台藩三大馬市に数えられるほど隆盛したことや、江刺地方が戦前まで馬産地として知られていたことを背景にした楽曲で、歌詞は作詞家の深沢健二、曲は新たな「江刺甚句」の編曲も手掛けた作曲家、赤星健彦(クレジットは筆名の山田若穂名義)によるもの。唄は江刺出身の民謡歌手、伊藤優子が担当しました。踊りも馬喰(家畜商)の所作や情緒をイメージした振り付けで、馬の手綱たづなに見立てた「ばくろうひも馬喰紐」を使用するのが特徴です。その後、昭和51年(1976)の42歳連「じゅうしかい十四会」がクラウン邦楽舞踏協会の兼坂芳寿による振り付けで「くみばくろう新馬喰ばやし」を創成。「くみばくろう組馬喰」と「りよくゆうかい流し馬喰」の二類型を誕生させています。

こうして42歳連、25歳連の各年代連では楽曲・振り付け・衣裳を創作し披露することが「江刺甚句まつり」最大の見どころとして定着(いわゆる「オリジナル曲」)。その文化は水沢や前沢にも波及しました。



▲ 42歳連「りよくゆうかい緑酉会」昭和49年(1974)



学校団体による「江刺甚句」パレード ▶



江刺甚句人形

昭和 56 年 (1981)
えさし郷土文化館

江刺地方の民芸品として開
発・制作されていた人形。現
在は廃絶。



江刺甚句まつり諸道具

個人蔵

手前が「馬喰ばやし」に使用する特有の「馬喰紐」(組
馬喰用)。奥の「団扇」は「江刺甚句パレード」で使用。

厄年によるライフイベント的習俗は古くから全国各地に存在し、独自の「通過儀礼」ないし「人生儀礼」が伝承され、それぞれの生活史や信仰史に影響を与えながら地方文化を形成してきました。

世相変化により現代では通過儀礼と宗教的な信仰心は希薄になっているとされるものの、「厄年に厄を祓う伝統儀礼」は比較的根強く残っており、いわば厄年儀礼は日本人の心情に深く潜んでいるものともいえます。この伝統的な厄年儀礼によって地域活性化を企図する自治体や地域も多く、厄年連が参加した大正時代の「秋葉神社火防祭」を発端とする「江刺甚句まつり」もその範疇に属するものといえます。一方で楽曲・振り付け・衣裳を毎年創成し披露するイベントとしては、高知県で昭和 29 年 (1954) から開催されている「よさこい祭り」や近年の「YOSAKOI ソーラン」系統のイベントが類似しますが、いずれも地域や企業などを中心とした団体により構成されており、特定年齢によって組織される厄年連を主体としたものは全国に類例がなく、江刺 (江刺甚句まつり)・水沢 (日高火防祭)・前沢 (前沢春まつり) の奥州市域のみにみられる特有の風習です。

これらの地域は、江戸時代に岩谷堂要害、水沢要害、前沢所といった仙台藩の拠点が存在した場所であり、往時は城下町が形成され、近代以降は旧市町それぞれの中心市街地となりました。また、祭りの発端も江刺・水沢は火防祭であり、前沢も熊野神社の祭礼を端緒としています。こうした伝統的祭礼や門付けなどの習俗を基盤としながらも当初から旧城下町という都市空間での開催を維持しているところに奥州市の祭りの特色があり、とりわけ厄年連による創作風習は文化的にも異彩を放つ存在といえるものです。

[参考文献]

- 『ひふせまつり』八申会 1973 年
- 『江刺の消防』江刺市消防本部 1979 年
- 『岩手の民謡』岩手県民謡協会 1982 年
- 『歌のちから—岩手県江刺郡の民俗歌謡資料と研究—』國學院大学日本文化研究所 2003 年
- 『ござんなし—江刺甚句まつり今昔—』鵬観会 1988 年
- 『玉里郷土誌』玉里郷土誌編纂委員会 1993 年
- 高木英理子「岩手県旧江刺郡「甚句踊り」の伝播と変容」(『民俗芸能研究』28 号) 民俗芸能学会 1999 年
- 野坂晃平「江刺甚句踊りについて」(『江刺のふるさと再発見—玉里編—』) えさし郷土文化館 2010 年
- 刀根忠良『岩谷堂 (江刺) のまつり写真集』2019 年
- 小玉克幸「江刺甚句まつり五十周年記念江刺甚句とその周辺」(『胆江日日新聞』連載) 2023 年